

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：32510
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2016～2019
 課題番号：16K02131
 研究課題名(和文) ビジネス・エシックスと異文化間コンフリクトの諸問題

 研究課題名(英文) Business Ethics and Intercultural conflicts

 研究代表者
 松井 佳子 (MATSUI, KEIKO)

 神田外語大学・外国語学部・教授

 研究者番号：60255180
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はグローバルな現代社会において、超国的かつ相互関係性の観点から、ビジネス・エシックスが直面する異文化間コンフリクトの諸問題にどのように取り組めばよいのかを検討した。ビジネス・エシックスがこれまで主に守備範囲としてきた道徳的主体としての企業活動の倫理、およびCSR(社会的責任)に回収できない領域に踏み込み、文化や価値観の多様性がビジネス・エシックスと密接な関係性を有し、文化の果たす役割の重要性を明確にした。異文化間コンフリクトは不可避であるが、倫理とは「人間の尊厳」「承認」「ケア」といった人間にとっての中核となる価値に依拠した、相互の文化的差異の認識に他ならないことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 ビジネス・エシックスという学術的分野に「文化」という観点を援用して、異文化間コンフリクトの諸問題を人間の内在的価値と連動させて考察することは、近年取り沙汰されている「働き方改革」とも関わりをもち、人間社会の共生の実態や意味をより深く理解することであると考えられる。関係性とコンフリクトは切り離すことはできない。今回の研究成果は、人々の接触・交流・交渉といった具体的な場面での軋轢への対応に有益であると思われる。そしてもっぱら情報・感情伝達・コミュニケーションの手段として使われている言語使用にも、他者へのケアは処方箋となりうるであろう。

研究成果の概要(英文)：This study examines how intercultural conflict issues in the area of business ethics can be considered the global modern society, utilizing transnational and relational perspectives. Until now, business ethics has primarily dealt with the ethics of company activities as moral subjects and by considering issues related to Corporate Social Responsibility (CSR). This study moves beyond these areas and explores the relationships between business ethics and cultural and value diversity, confirming the importance of the role that culture plays. Intercultural conflicts may be unavoidable, but the study clarifies how ethics can be ultimately understood as an awareness and recognition of cultural differences based on core human values such as "human dignity", "recognition", and "care."

研究分野：比較文学・比較文化・倫理学、思想

キーワード：異文化間コンフリクト ビジネス・エシックス ケア倫理 多文化共生

1. 研究開始当初の背景

かつて神田外語大学の異文化コミュニケーション研究所主催で、松井は数回、国際シンポジウムを開催して、「ビジネス・エシックスを多角的に考える」のテーマを取り上げたが、今回の研究は、そのときの成果を踏まえ、より問題を掘り下げる意図を有するものである。

グローバル化がもたらした二つの顕著な動向は相互連動と画一化である。世界の企業はその規模にかかわらず、これらへの対応を迫られる。従来のビジネス・エシックスは企業とステイクホルダーとの良好な関係性や CSR の圏内に概ね収まっていたが、社会は様変わりし、さまざまな意見の対立や異文化間コンフリクトを回避することはできなくなってきた。そしてこのような状況下、私たちの生活はビジネス世界と決して無関係ではない。

異文化間コンフリクトの諸問題を、予定調和的あるいは合目的に解消あるいは解決に向けて検討するのではなく、コンフリクトを交流・交渉・コミュニケーション行為の不可避な現象と捉え、コンフリクト・レゾリューション(紛争解決)ではなく、コンフリクト・マネジメント(やりくりというニュアンス)として、つまりコンフリクトといかに共存していけるかという課題を担うこととした。したがって、ビジネス・エシックスと異文化間コンフリクト問題の検討をビジネス活動に限定して考えるのではなく、あえて広義の自己 他者問題をも視野に入れ、学際的な観点から検討を加えることによって、ビジネス・エシックスをある種の人間学として、グローバル社会の倫理的責任要請としての考察に着手することになる。

2. 研究の目的

本研究では、ビジネス・エシックスを、異文化間コンフリクトという文化的な観点から捉え、企業および個人が担うべき倫理・責任の問題として主題化する。グローバル化の趨勢の中で、企業も利潤追求や CSR (社会的貢献・責任) のみならず、異文化間コンフリクトを抱え込むことが避けられない。そして私たちにとって異文化間コンフリクトは生活条件であるともいえる。

海外のビジネス・エシックスの二人の研究者、Andrew Crane と Dirk Matten の著書『Business Ethics: Managing Corporate Citizenship and Sustainability in the Age of Globalization』(2004)は倫理的な視点に触れているが、文化に着目した倫理的分析はなされていない。文化的差異を合意形成に導くという姿勢ではなく、異文化間コンフリクトとの持続可能な共存を倫理的に実現させるために、わたしたちは何をどう考え、どのような言動を目指すべきであろうか。〈普遍〉と〈個別〉の折り合いは可能か。哲学、比較文化論、異文化コミュニケーション、社会言語学、経営学などの異なる分野の研究者たちとの研究会や国際ワークショップにおける意見交換や議論を通して、総合的文化学としての分析・検討を進める。本研究のキーワードとしては「ケア倫理」、「受容」、「寛容」、「コンフリクト」、「承認」、「尊厳」、「コミュニケーション」が挙げられる。

3. 研究の方法

関連図書を読み進めるとともに、国際ワークショップや研究会を開催し、研究交流や情報交換を行いながら、参加者全員の各々の研究分野の視座から研究発表をして討議しながら議論を深め、ビジネス・エシックスと異文化間コンフリクトの諸問題を検討してきた。参加者は国内外の研究者のみならず、ビジネスの現場から企業の方々、および学生諸氏である。

またそれとは別にドイツのミュンヘン大学へ出張し、異文化コミュニケーション学や日本文化の専門家の方々と情報交換やディスカッション・面談を行い、関連分野のあらたな知見を得ることができたのは大変有意義であった。

多角的な立場から、理論的な見解やビジネスの現場での体験談などを傾聴することによって、概念と経験のすり合わせをすることができた。イギリスのロンドン大学やフィンランドのヘルシンキ大学の研究者の方々の発表をめぐり、十分な時間をかけて討議を行い、超国的なアプローチによる成果に結実させることができた。国際ワークショップの際の使用言語は英語であったが、English as Lingua Franca の使用現場となることで、自己言及的な検証材料の役割も検証の対象として機能したことは予期せぬ成果となった。

4. 研究成果

この4年間越学的の研究期間の間、毎年国際ワークショップを開催し、グローバル社会のなかでのビジネス・エシックスと異文化間コンフリクトの諸問題を分析・検討してきた。初年度の2016年度はグローバル・コミュニケーションにおける倫理的思考様式とビジネスの実践的思考様式

の交差について、2017年度は「ケア倫理」をコア概念として設定し、理論的アプローチと実践的アプローチの交差点を探った。その際、哲学や応用言語学の視点の援用に加え、文化媒体としてのステイクホルダーの考察によって、ビジネスと倫理を対立関係として見るのではなく、不可分の結びつきがあるものとして把握すること可能であることが明らかになった。2018年度は「グローバル人材」の超克も試みをテーマとして「ワーク・ライフ・バランス」の問題を分析・検討した。働くことと生きること、という人生の根本的なテーマの掘り下げは、ビジネスと倫理の関係をほぐすのに大変有益であった。そして最終年度の2019年度には、ビジネス・エシックスにおける異文化間コンフリクトの処方箋として、コンフリクトをある種の合意によって解消・解決へと向かわせるのではなく、「ケア」「差異の受容」「尊重」「承認」の果たす役割および価値について深いディスカッションを行った。その中でとりわけ有意義であったと考えられるのは「承認」と「ケア・ケアリング」が調停可能、共存可能であるという見解であった。

本研究の最終成果としては、ビジネス・エシックスの領域において異文化間コンフリクトと倫理の問題について考察するとき、＜普遍＞と＜個別＞、＜概念＞と＜経験＞の擦り合わせを行うことによって、「尊厳」「人権」「承認」が「ケア倫理」と補完関係になり、文化の多様性を尊重することができ、力の行使によるコンセンサス（合意）としての解決法を求めず、倫理的なモメントが担保できうらということが明らかになったということである。この確認の持つ意味は大きい。論文集を計画していたが、それはまた別の機会を待ちたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Keiko Matsui Gibson	4. 巻 Volume 56, Issue 1
2. 論文標題 Re-examining Human Dignity in Literary Texts: In Seeking for a Continuous Dialogue Between the Conceptual and the Empirical Approaches	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Dialog	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松井 佳子
2. 発表標題 「個別性と普遍性が共存する文学の力：人間の生と社会変革へのまなざし」
3. 学会等名 一橋大学政策フォーラム『人文学・社会科学におけるインパクトとは何か』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松井 佳子
2. 発表標題 「ケネス・レクスロス：「詩」と「政治的なるもの」のはざままで
3. 学会等名 国際学術シンポジウム『文学による日米の架け橋：ケネス・レクスロス、翻訳、戦争』（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松井佳子
2. 発表標題 Vulnerability and Dignity: Are They Mutually Exclusive?
3. 学会等名 一橋哲学フォーラム（国際ワークショップ）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 齋藤 直子、ポール・スタンディッシュ、今井 康雄	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 256
3. 書名 翻訳 のさなかにある社会正義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----